



©JFA



Kohzo Tashima

サッカー・ワールドカップ、日本代表 必勝祈願!

目指すは常に「世界」

本誌 田嶋さんは指導者養成、選手育成に長く注力されてきましたね。

目標は、ベスト4。懐疑論も聞かれますが、常に世界を目指している私たちにとっては、当然の目標なんです。万全の準備をして、世界を驚かせたいですね。

サッカーは「絆」を育む

本誌 実は和歌山は、サッカーとの関係が深いのですが、ご存知でしょうか。

田嶋 幸三氏(以下田嶋) 現役当時に強豪国の旧西ドイツへ留学した際、ワールドカップ出場どころか、プロ化もなされていない日本との差、特に進んだ指導法に感激したんです。持久走一つとっても、コーチがその目的を納得するまで理論立てて選手に説明し、各選手の能力に合わせたペースなどを指示する。選手は目的が明快なので楽しんでそこに練習するし、レベルアップも速い。日本サッカー強化のためには、まず指導者の養成だと痛感し、引退後、93年頃から日本サッカー協会(以下JFA)で養成プログラム作成に取り組みました。

田嶋 もちろん。日本でのサッカーの普及に尽力した中村覚之助氏の出身県であり、JFAのシンボルマークにある三足鳥と、熊野三山の八咫鳥との関連性も知っています。特に八咫鳥は、神武天皇の道案内をしたという鳥。日本サッカーが目指す方向へと進んでいく上で、象徴的な存在ですね。同時に熊野三山にもシンパシーを感じていて、ワールドカップ開催年にはJFAとして、必勝祈願の参拝をさせてもらっています。

田嶋 「世界」です。世界の強豪国と互角に戦うためには何が足りないのかを、強豪国に指導者を送り、徹底的に分析。プログラムを作成し、選手育成に努めました。近年の日本サッカーの躍進に貢献できたと思っています。今年のワールドカップで私たちが掲げた

本誌 今年もお待ちしています。ところでJFAでは、地域支援を積極的に行っていますね。

田嶋 まずは、Jリーグクラブの設立支援による地域活性化への寄与。和歌山でも「アルテリ・ヴェオ和歌山」がJ

2010 FIFA World Cup South Africa

財団法人日本サッカー協会専務理事

巻頭スペシャル・インタビュー

田嶋 幸三氏

日本中が熱くなる日々、再び。開幕まで90日を切った、2010FIFAワールドカップ南アフリカ大会。日本代表の戦いぶりに注目が集まる中、長年、日本サッカーの躍進を支え続ける、田嶋幸三氏を直撃取材。本大会への意気込みはもちろん、日本サッカーの歴史、未来、さらには知る人ぞ知る、和歌山とサッカーの関係を、熱情あふれる言葉で語ってもらった。



本誌取材の前に、「熊野三山協議会」が日本サッカー協会を表彰訪問し、「熊野牛王神符」と「御燈祭の松明」を寄贈。今年の必勝祈願祭へは、田嶋氏も参加する予定です。

Profile

田嶋 幸三 (たしま こうぞう)

1957年生まれの元サッカー日本代表選手。現在は(財)日本サッカー協会専務理事。選手現役時は高校、大学、日本サッカーリーグで日本一に輝く。引退後は協会の強化委員、指導委員などを歴任し、ユース世代の日本代表監督を務めるなどした後、06年から現職。



東京都文京区にある「JFAハウス」。日本サッカーの過去、現在、未来が一目で分かる「日本サッカーミュージアム」を併設している。

わかやま的 蹴球話 — 知られざる和歌山とサッカーの関係 —



熊野那智大社の「八咫鳥」像

日本サッカーの象徴「三足鳥」と熊野の神鳥「八咫鳥」

日本サッカー協会のロゴマークに採用されている、三本足のカラス。協会HPによると「中国の古典にある三足鳥と呼ばれるもので、日の神=太陽をシンボル化したもの」とされているが、その後継記述「日本では、神武天皇御東征のとき、八咫鳥が天皇の軍隊の道案内をした(後略)」の「八咫鳥」、これは和歌山の熊野三山(本宮大社、速玉大社、那智大社)の神鳥のこと。「古事記」などには、神武天皇が東征の際、日の神アマテラスから遣わされた三本足の鳥(八咫鳥)に先導され、熊野・吉野の山中を行軍したとあり、以来熊野の象徴になったとされる。ロゴマークとの関係性は明確ではないが、一説には那智勝浦出身の中村覚之助に敬意を表し、採用したとも。

近代サッカーの普及に貢献した「中村覚之助」

1878年那智勝浦町生まれ。1900年、東京高等師範学校(現筑波大学)に入学。英国の本を翻訳・編集してサッカーの指導書「アソシエーションフットボール」を編纂し、ア式蹴球部を創設。これが日本で最初のサッカーチームと言われている。1904年、横浜で行った外国人チームとの最初の対外試合が新聞で報道され、全国の中学校から蹴球指導の依頼が殺到、部員は各地へ赴いたという。覚之助は1906年、29歳の若さで急逝したが、日本にサッカーを普及させた一人として、その名を歴史に刻んでいる。

